

昭和の地名をたずねて②

追分 交通の分岐点を意味する。

赤城山の西麓にある昭和村は、昭和三十三年（一九五八）に旧糸之瀬村と旧久呂保村が合併して誕生したが、その糸之瀬村は明治二十二年（一八八九）に糸井村（現大字）と貝之瀬村（同）が合併したものであった。「追分」はその大字系井の中の小字名である。

追分の地名について「糸之瀬村誌」では次のように紹介している。文久年間（一八一〜一八六四）このあたり一帯は雑木林や茅などが茂っていた。ある日、茅刈りに来た一人の農夫が突然狼に襲われた。農夫は命からがら逃げながら山の神に助けを乞うた。現在の十二神社（山の神）のある場所まで逃げてきたところ、いつの間にか狼は別の道に行ってしまった。これは十二様のご利益だと喜び、追われて来て分かれたことからこの地を追分と名付けた。

また、次の一説もある。徳川時代、前橋城主からの書状を持った者が、途中で間違いがないうようにと犬に送られてきた。夜も明け、無事に追分から根利村に行ける見通しがついたので犬に「帰ってもらいたい」と頼んだところ、元

来た道を帰っていったことから追分と呼ぶようになったという。追分という地名は各地にあり、牛馬を追い分ける地とか「合い別れ」からという説地名用語語源辞典もある。

さて、追分地域をはじめ赤城原の大地の変遷にふれてみると、明治初頭までは周辺十四カ村の入合秣場（周辺住民が放牧などで立ち入る山林や原野）であった。ところが、明治六年の地租改正によって御料地となってしまった。昭和十六年には、戦火の拡大に伴って赤城原七百町歩におよぶ土地が陸軍の演習場に供された。

戦後、失業対策や食糧増産、農業離職者の帰農の促進で赤城原の大地に最初の入植者が入ったのは昭和二十一年である。赤城久呂保に七十七名、赤城高原（糸井地区）に百二十七名であった。先人の方々は艱難辛苦を乗り越え、たゆまない開拓魂を持って原野を開墾したのである。今では広々とした畑が連なり、関東の小・北海道を思わせる「やさい王国」昭和村として全国的に知られる大生産地となっており、農業が盛んな地域でもある。

昭和村ボランティアガイドの会

会長 倉澤 俊雄



地域包括支援センターだより

音楽療法を体験して脳や体を健康に

音楽療法士の高橋由貴子さん（内田病院）を講師に迎えて音楽療法会が地域活性化センターなど村内4会場で行われました。今年もコロナ禍のため、感染症対策をとりながらの開催となりました。

参加者は「さざんかの宿」や「いい日旅立ち」といった名曲を、言葉遊びの要素を取り入れて歌ったり、タオルを使った体操などに取り組みました。講師の高橋さんは「歌を歌いながらの言葉遊びは、例え間違えてしまっても、取り組むだけで脳を使って活性化できるので効果が期待できます」と話していました。



歌のリズムに合わせて体を動かします



演奏しながら指導する高橋さん（左）



タオルを使い、脳と体をともに使う体操を体験



問合せ 地域包括支援センター ☎ 20-1126

